

甲状腺外科草子 38

古文復習：梅のかほり

杉野 圭三

古より花と言えば梅を指したものだが、時代とともに桜を表すようになってきた。

梅で最も有名なのは菅原道真公の歌である。
東風吹かば 思ひ起こせよ 梅の花 あるじなしとて 春な忘れそ (拾遺和歌集 1006 番)



防府天満宮

わが家には昔から多くの梅の樹があり、しかも家族3人は25日生まれで天神様との繋がりを感じる。現在、「豊後」、「加賀」、「南高」、「鶯宿」、「花香美」、「露茜」、「鹿児島紅」など10種類以上の梅が毎年、花や実を付け楽しませてくれる。



加賀

豊後

鹿児島紅

令和の年号制定で有名になった「梅花の宴」は天平二年(730年)に、大伴旅人邸(大宰府)で開催され32首の歌が詠まれた。

梅の花 今咲けるごと 散り過ぎず 我が家(へ)の園に ありこそぬかも (八一六 小野老)
春されば まづ咲くやどの 梅の花 ひとり見つつや 春日暮らさむ (八一八 山上憶良)

青柳 梅との花を 折るかざし 飲みての後は 散りぬともよし (八二一 沙弥満誓)

我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも (八二二 大伴旅人)

この梅花の宴の序文が「令和」の原点である。「初春の令月にして気淑く風和らぎ 梅は鏡前の

粉を披き 蘭は珮後の香を薫らす〜」



仁和寺の令和の書(令和元年) 松山城の紅梅

古今和歌集には多くの名歌があり、百人一首には紀貫之の歌が取り入れられた。

人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香に匂ひける (紀貫之 百人一首 三五)

この歌の詞書には、「梅の花を折りて詠める」とある。梅には桜にない繊細な芳香があり、恋の歌には欠かせない風情を醸し出す。

花の香を 風のたよりに たぐへてぞ 鶯誘ふしるべにはやる (紀友則 古今和歌集一三)

春の夜の 闇はあやなし 梅の花 色こそ見えぬ 香やは隠る (凡河内躬恒 古今和歌集 四一)



鶯宿

紅梅

新古今和歌集以降には伊勢物語の「月やあらぬ〜」の歌を主題とした物も数多い。

梅の花 匂ひをうつす 袖の上に 軒(のき)もる月の 影ぞあらそふ(藤原定家、新古今和歌集 四四)

梅の花 飽かぬ色香も 昔にて 同じ形見の 春の夜の月(俊成卿女 同上 四七)

風通ふ 寝覚めの袖の 花の香に かをる枕の 春の夜の夢(俊成卿女 同上 一一二)

この歌は、「桜」に入れられたが、歌合せの時の主題は「梅」であったとのこと。

素晴らしい名歌である、これはどう考えても梅の歌でしょう!

参考文献

百人一首. 古今和歌集、新古今和歌集、ビギナーズクラシックス. 角川ソフィア文庫

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022年8月4日